

本

分厚い本が読めなくなった。

以前は、800ページを超える『北一輝思想集成』ぐらいは、「昼夜で読了できたのに。上下巻といった分冊も嫌いで、『昭和天皇実録』なども全一冊での刊行を期待していたくらいだ。今は昔の話となったが、表紙かと思紛うばかりの背を持つ新書が跋扈した時代があった。ノベルス系の本の中には、書店で用意してくれるブックカバーでは、端を「ちょん」と引っ掛けるぐらいしかできないものもあった。ほとんど分厚くなっていく背に、わが子の成長を見る思いがしたものだ。混み合った車中で吊り革を片手に読むのは、たいそう骨が折れたが、それでも、読み切ってしまったときのために、もう一冊予備の本をカバンにしのばせる余裕が、当時の私にはあった。

それがどうだ、最近300ページ級の本でもあやしくなってきた。400ページは厳しくて、500ページを超えると、なぜ分冊にしないのかと版元を恨んでしまふ。ここ数ヶ月の最長不倒距離は291ページ(本文)の『デリカシー体操』だが、これはヨシタケシンスケさんの初期スケッチ集だった。

濃縮もだめ、希釈の方にも進めない。残る方法(そして読書法として考え得る、唯一の方法)は「部分読み」しかない。800ページが読めないなら、全部を読まなきゃ良いのだ。気に入った、あるいは気に入った200ページだけを、しっかりと読めば良いのだ。うまくすれば、次の200ページに進めるかもしれない。つながつていけば、結果として巻頭から巻末まで、800ページを丸々読了することになるだろう。あわよくば、別の本の200ページにも次々に移っていつて、本と本をまたぐ一貫した文脈に出会えるかもしれない。このアイデアは、ひょっとすると私の悩みを解消するだけでなく、新しい読書法の提起につながるかもしれない。

ある新聞社の読書に関する世論調査によると、全体の半数以上の人が、直近1か月間に1冊の本も読んでいないという。その一方で、ほぼ90%の人が読書は人生に豊かにすると考えていて、実際に本から考え方や人生観に影響を受けたという人も70%に達しているそうだ。読書離れと本への期待。このアンビバレントな状況は、次のように解釈できるのではないか。

一冊の本を読み切ることのできる人が、少なくなってきた。

これには、さまざまな理由があるだろう。私のように読む力が落ちてきている場合もあるだろうが、より普通に考えられるのは、読書時間の不足である。好きな時に、好きなだけ、好きな本を読める――

内容や分厚さに圧倒される以前に、文字の詰まったページの塊(かたまり)にたじろいでしまうのだ。気力・体力の衰えは隠しようもないところまで来ているが、それよりも深刻なのは脳力の減衰なのかもしれない。

今の適量は200ページ。いや、本なんて、それぐらいのボリュームでちょうど良いのさ。書店にあふれる新書を見たまえ、ページ数の最頻値は200ちょっとじゃないか。厚みの揃った背は、美しい街並み景観を彷彿とさせる。などと強がってみても、やはり800ページの本が読みたい。かつての「読んだあゝ」という満腹感(満脳感)を、もう一度味わいたい。200ページのボリュームで800ページの内容を楽しむ方法はないものか。

本の内容濃度を、うんと高めるといっはどうか。だが、800ページの本を25度の酒だとすると、200ページに濃縮すれば100度になる。ここまでくると、もはや酒とは言われまい。消毒用のエタノールである。飲み干す前にお陀仏だ。いやそれ以前に、これは読書法とも言えないのではないか。本がなくては読書はできない。濃縮本を読むには、前提として濃縮本が必要だ。だが、そういう本をつくっている(つくってくれそうな)版元はないだろう。アルコール度数100%の酒をつくる醸造所がないように。ポーランドには96度のウォトカがあると聞くが、飲むときは希釈するらしい。濃度100%の本も薄めれば読めないこともないだろうが、4倍に薄めれば800ページに戻る。なんのた

幸せな――人は、そう多くはいないのである。

本を読みたい人(なのに読めない人)にとつて、「部分読み」はまさに福音と言えろが、問題がないわけではない。それは、読もうとする「200ページ」が、800ページのどこにあるか、わからないということである。読みたい本をどれだけ睨んでも、その本を丸々一冊読まない限り、気に入ったところも、気になるところも見つかりはしない。「部分読み」をするためには、まず「全部読み」するしかないのである。慣れば、目次に目を通すだけで、「部分」の見当をつけられるようになるかもしれない。だが私のような者は、熟練の前に命が尽きるだろう。

この困難をどう打開するか。そもそも「私」が部分を読もうとしたのは、「私」は全部を読めないからだった。「私」に読めないなら、「私以外の人」に「全部」を読んでもらい、「部分」を教えてもらえない。

そう考えて、この「ホンの一部」がひねり出された。読む力がめつきり衰えた私の事情から始まったのだが、「読みたいけれど、読めない」といった悩みを共有する、世の「多く」の読書人のためにもなる企画だと思いたい。今回は、「部分読み」が有効な読書法となるかどうか、その実証実験とも言える。

推奨本の紹介はよく目にされるだろうが、ここでは本を丸ごと一冊ではなく、その一部だけ(「章」単位ぐらい)だけを推奨する。その本の「芯」の部

めに濃縮したのやら。

濃縮がだめなら希釈はどうか。うんと薄めて200ページでわかる800ページの本とか、4分の1で楽しむ800ページとか。だが、私はこの手の本で理解できた例(ため)しがない。読んで楽しいと思っただけ記憶もない。このあいだ「90分でわかるウィトゲンシュタイン」という、奇跡を起こしてくれそうなお本を読んでいる学生さんを見かけた。拝むようにして借りて読んだが、奇跡は起こらなかった。たぶん私の体質には合わないのだろう、気持ちよく醉えない。水臭い酒というより、酒臭い水に思えてしまふのだ。



分、真価を浮かび上がらせる「パスワード」のようなところ、といったように、一冊全部は読めなくても、ここ――だけは読んでおいた方が良いでしょう。そのような「要所」を、読者に紹介させていただきます。

推奨の重責は、懇意にしてもらっている(こんなことは懇意の人でないと頼めない)読み巧者の方々に負ってもらうことにした。私じしんは、他人様に本を推奨できる者ではないが、責任上、最後のところにこっそり顔を覗かせてもらっている。

さあ、みんなで本を読もう。

一冊全部じゃなくても、「ホンの一部」で良いじゃないか。

(文・中島敬介)

の 一部

赤

青木 健

AOKI Takeshi

静岡文化芸術大学・古代イラン学教授

司馬遼太郎「ペルシャの幻術師」

昭和31年5月、『講談倶楽部』※に収録

本作品は、1956年に、当時34歳の司馬遼太郎（1923年〜96年）が、「司馬遼太郎」名義で最初に公表した短編小説とされる。「推奨するホンの一部」として、筆者はこの作品を紹介したい。なお、本作品は、2021年4月から、『週刊文春』誌上でコミカライズされている。

本作品の時代は13世紀、舞台はイラン高原東部の架空の都市メナムである。配役はシンプルで、①襲来するモンゴル軍のハーン（族長）ボルトル、②美姫ナン、③ボルトルの暗殺を企む幻術師アッサムの3名で全編が織りなされている。

本題に入る前に、些細な指摘から始めたい。イラン学者からすると、地名も人名もペルシア語としては響かない点に、若干の違和感があった。筆者の頭の中では、イラン・ホラーサーン州のトゥースやニ

るように、この短編ではアッサムと云う人物像が喚起するイメージが全体の推進力となっている。この人物は「背が高く、青いターバンに青い衣服を身に纏い、岩山の上の石造の家に住み、マホメットの徒も仏陀の徒も否定する」とされる。そして、美姫に幻覚を提供し、それによってボルトルの暗殺を果たそうと目論む。彼が操る奇怪な幻術が、全編のクライマックスを為す。但し、全てを押し流す最終的な大洪水が、アッサムによるものなのか、彼は単にそれを予知したものなのかは不明である。全体を通して、まるで白昼夢のような読後感である。

司馬遼太郎は、この人物造形に当たって、ほぼ確実に、13世紀にアラムート要塞に立て籠もってモンゴル軍に抵抗したイスマール派ニザール派の史実を下敷きしている。だが、若村忍（1905年〜1988年）が同じ主題を扱った『暗殺者教団 イスラム異端派の歴史』（筑摩書房）を出版したのが1964年、バーナード・ルイス（1916年〜2018年）の『暗殺教団 イスラムの過激派』（新泉社）の翻訳が出版されたのは1973年である。1956年段階でイスマール派ニザール派に関する情報にアクセスするとしたら、1914年に出版されたマルコ・ポーロ『東方見聞録』の日本語訳の中の数行くらいしか思い当たらない。当時、そのような情報にまで接して、これを小説に昇華しようと試みた司馬遼太郎の熱意の表れである。大阪外国語大学モンゴル語学科卒と云うバックグラウンドがあるにせよ、余程イラン・中央アジアが御好

シャープルといった古都を舞台として思い浮かべていたのだが、「メナム」と云われるとタイのメナム川を思い出し、「ナン」と云うとペルシア語ではあるがパンを指し（正確にはナン）、「アッサム」では確実にインド東北部の紅茶を連想してしまった。ついでながら、イラン高原に進撃したフラグの第4子も、「ボルトル」と云う名前ではない。

このネーミングに引き摺られて、筆者の頭の中では、温暖湿潤なタイのメナム川流域で、ペルシア風パンとアッサム紅茶が惹かれあって、偽モンゴル王子を打倒する図式が思い浮かんだ。——無論、これは瑕疵である。昭和31年と云う時代背景を考えれば、小説の中でイラン文化に関する厳密な考証を要求する方が無理である。ここでは詩的なイメージの方を味わうべきだというのは、筆者としても承知している。イランを舞台として選んだ時点で、この短編小説の（当時に於ける）驚くべき独自性は疑う余地がない。

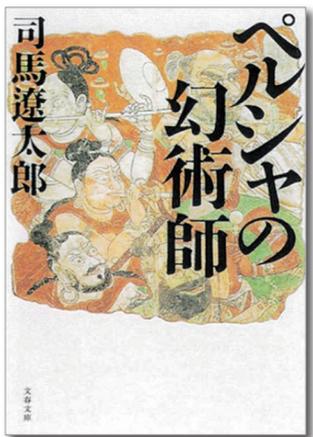
因みに、これを支える文体は、後年の司馬文学に特有のハイカラな漢語使用の萌芽が見られると共に、日本語にイラン・中央アジアの言語のルビを振ることで、オリエンタルな興味を醸し出している。例えば、「月の蛇」に「マーマル」とルビを振り（これは正確、「母」に「マダール」とルビを振る（正確にはマードル）が如きである。もし、司馬文学の中で、このような漢語+オリエンタルな二重性を保った文体が使われ続けていたら、イランや中央アジア、モンゴル、満州に題材を取った浪漫的な伝奇小説が

きだったのだろうと思わざるを得ない。

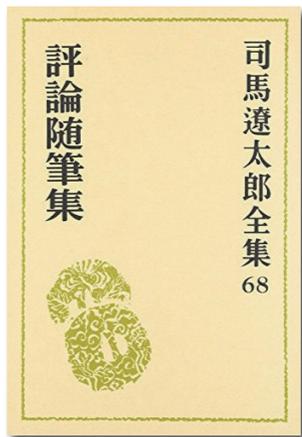
反面、後年の司馬文学に見られる人物造形が、ここに現れていない点にも注目したい。筆者が知る限り、司馬作品には、何かの信念にひたむきに忠実な男性像が多く出現する印象がある。織田信長しかり、土方歳三しかり、坂本竜馬しかり、秋山兄弟しかりである。ここから予想して、アッサムの背景が描き込まれ、イスマール派の秘教信仰に基づいてボルトルを狙うのかと想定していたら、案に相違して、「ある老人」に砂金2袋で雇われて職業的な暗殺者を演じたとの設定であった。もう少しアッサムを掘り下げていたら、もっとパセティックなコントに仕上がったのではないかと思う。

以上、「ペルシャの幻術師」を挙げて、その背景の余白部分を推測してみた。最後になるが、司馬遼太郎の最初の小説がイランを舞台にした「ペルシャの幻術師」で、最後の小説が満州を舞台にした『韃靼風録』だというのは奇しき因縁を感じる。「西域小説」と云うと、すぐに井上靖（1907年〜1991年）や陳麟臣（1924年〜2015年）を思い浮かべるが、1956年段階では、ここに司馬遼太郎が名を連ねる可能性があったのである。もっとも、そうならなかったら、日本の文壇が西域作家を一人手に入れる代わりに、我々は『竜馬がゆく』も『国盗り物語』も『坂の上の雲』も失っていただろうが。

※1911年創刊の大衆文学雑誌。入手困難。司馬遼太郎は第8回「講談倶楽部賞」をこの作品で受賞した。



ペルシャの幻術師
司馬遼太郎
文春文庫



司馬遼太郎全集 68
ペルシャの幻術師
司馬遼太郎全集第68集附録収録
文藝春秋

量産されていたのではないだろうか。——もちろん、このような文学的冒険に乗り出した場合、漢語とオリエンタルなルビの間に余程巧妙なコントラストを発生させない限り、軽佻で鼻持ちならない文体に堕してしまう恐れがあるし、そもそも日本史上の英雄を描くには、全く適しない文体になっていたはずであるが。

さて、本稿の本題は、幻術師アッサムの造形に至る余白部分である。これは、当然、作中では語られていないが、タイトルが「ペルシャの幻術師」とあ

甲田 烈 KODA Retsu
東洋大学井上円了哲学センター客員研究員
藤田一照×山下良道
『アップデートの仏教』
幻冬舎新書、2013年・第五章

医療・看護・経営などで人口に膾炙している言葉に「マインドフルネス」がある。これは仏教の瞑想法から、その効果に着目して宗教色を脱色したものだ。では、仏教界はそうした動向に対していかに応答しているのだろうか。本書はこの「マインドフルネス」も含めてこれまでの仏教を10〜30というように区分し、そこから新たな展望を拓こうと試みた魅力的な対談から成っている。

とはいえ、著者の二人は仏教界においても変わり種かもしれない。藤田と山下はともに安泰寺の内山興正師のもとで参禅し、藤田はそのうちアメリカで十数年の坐禅指導を行い、山下もその後アメリカでの生活を経て、ミャンマーで南伝仏教の修行を経て帰国しているという経歴を持つ。そこから二人は、アメリカにおける仏教徒の真摯さに打たれたが、同時にその問題点も見いだす。仏教10がそれまでの形骸化した仏教であるのに対して、瞑想の方法を教えるのが20となる。

の部

推奨する

本

そのポイントとなるのが、「シンキング・マインド」という言葉だ。

それは見聞覚知の主体のことである。「瞑想」という方法があり、それを行する「私」がいて、「私」が心身を観察する「気づく」。こうした構図で解釈してしまうと、いつまでも雑念は止まず、止んだとしても努力が続ぎ、そうできない自分へのダメ出しも起きてくる。しかし、けれども、それは瞑想の本質なのだろうか。

「見聞覚知の主体が主客二元であるのに対し、気づきの主体は主客未分というか、主客以前？」という藤田の問いかけに対して、山下は「そうですね。非二元的な（ノンデュアルな）ということですね」（第五章）と応じている。ここが仏教3.0の要諦となる。では、「シンキング・マインド」の手放しから出発するとは、どういうことだろうか。その実践にもここでは足を踏み入れている。

とりわけこの第五章は現代仏教の思想的な見通しを得たい読者のみならず、瞑想実践者に対しても示唆に満ちている。

平氏滅亡に戦功のあった義経を頼朝は追い詰め、ついには奥州藤原氏の元に落ち延びた弟を自害に追い込んだことになっている。その契機となったとされているのが有名な「腰越状」だ。元暦二年（一一八五）五月、平氏一門の総帥・平宗盛を鎌倉に護送した義経は、西の境界である腰越で鎌倉入りを許されず、腰越からの書状もかえって兄の激怒をかってしまう。しかし、まず「腰越状」は文面からして偽作の可能性が高い。それに加えて、もし頼朝がこの時点で義経による謀反の芽を見抜いていたとしたら、京に戻さず捕縛しているはずである。また、その後の文治元年（一一八五）の土佐坊昌俊による義経襲撃事件にしても、弟の殺害が頼朝の命令によるとするには、入京から実際の襲撃までの刺客の動きが不自然である。「鎌倉後期に成立した歴史書『吾妻鏡』は、北条氏による政権掌握を正当化する側面を持つ」（第二章）。

このように、後世の歴史書や一面的な評価を典拠に、特定の人物を陰謀家だと即断することの危うさを、この事例に限らず、本書では細かに解明している。

呉座勇一
『陰謀の日本中世史』
角川新書、2018年・第二章

これまで数多の「陰謀論」がささやかれてきた。それが一部のマニアや特定の思想を信奉する少数の人間に対して影響を持つくらいであれば、問題にはならない。しかし近年ではSNSなどを通して誰でも発信できるようになったことも背景に、話の小ネタではすまされない影響力を持つことがある。

それにしてもなぜ人は陰謀論にハマるのか、そしてなぜ、それらが一定の説得力を持ってしまっのか。本書は、そういった「陰謀論のリテラシー」を身につけるための格好の練習台を提供してくれる。「陰謀論への耐性を身につけることは、疑似科学を利用した悪徳商法を見抜く上でも役に立つと思う」（終章）というゆえんだ。

とはいえ、著者が取りあつかうのは、現代のイデオロギー対立とからまりあいながらの係争中の陰謀ではなく、保元の乱（一一五六年）から関ヶ原の戦い（一六〇〇年）までの日本中世史におけるいくつかの事件である。

ここでは一例をあげよう。鎌倉幕府を開いた源頼朝とその弟の義経の悲劇はよく知られているだろう。

植村邦彦
『隠された奴隷制』
集英社新書、2019年・第四章

「一般に、ヨーロッパにおける賃金労働者の隠された奴隷制（Veilung）は、新世界での文句なしの奴隷制を踏み台として必要としたのである。」（はじめに・第四章）

本書の衝撃力を持つタイトルは、二度にわたり引用される、マルクスの『資本論』に由来するものだ。そして、書名と同名の第四章が、まさにその白眉となる。

私たちは、建前上は市民社会の構成員の一人として、自由な存在だということになっている。文字通り、他者の権利を侵害しない限り、どのような思想信条を抱いてもよく、これも両親や友人たちとの関係はあるとしても、どこに住むのも各人の裁量に任されている。しかし、「働く」ことはどうだろう。「我が暮らし楽にならざり」は俗言としても、とりわけ平成不況以降、社会における格差拡大に不穏な空気を感じている方は多いのではないだろうか。

この本は、そんな空気の背景となる構造を世界規模で解き明かしている。そうして解き明かすだけでなく、ささやかな脱出口も提示している。

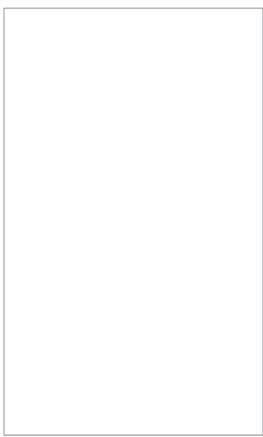
出発点は、直接的奴隷制と間接的奴隷制の違い



アップデートする仏教
藤田一照×山下良道
幻冬舎新書



陰謀の日本中世史
呉座勇一
KADOKAWA/角川新書



隠された奴隷制
植村邦彦
集英社新書

だ。前者はともわかりやすい。たとえば黒人奴隷をイメージすればいい。植民地、あるいはそこから連れてこられた奴隷たちが、身柄を拘束され、主人の農園で過酷な労働を強いられる。「啓蒙の世紀」と呼ばれる一八世紀は、著者によればヨーロッパ人が経営する黒人奴隷制プランテーションの最盛期だったという。けれどそんなことは過去のこと。私たち現代人になんの関係があるのだろうか。しかし著者は大ありだ、という。なぜなら、現代の私たちは、雇用主と契約的には対等な契約を結ぶことで、自分の労働力を労働市場で販売し続けることを「強制」されているのだから。

この、「自分は自由だ」と思い込んでいても、実は不自由なのだ」ということが、「間接的奴隷制」である。いつまでもなく、新自由主義はまさにその名の下に見せかけの自由の覆いとして機能するだろう。しかしそこには「ソミア」という東南アジアの低地民のように、労働力を集約する機構としての国家から逃亡した人々もおり、サボリや欠勤、だから仕事によるサボタージュのように、今すぐにもできそうなことはある。

資本主義社会の現状とその未来を考える上で、とても刺激に満ちた一冊である。

の 一部

ホシ

中野剛志

『日本経済学新論』

『洪沢栄一から下村治まで』

ちくま新書、2020年・第三章

TPP反対や現代貨幣理論(MMT)の紹介などで知られる論客による意欲的な著作である。その企画するところは、「日本経済学」という思想の系譜を発掘すること。そしてそれを継承・発展させることである。

他の学問と同様、経済学も欧米からの輸入学問とされてきた。しかし著者はそうした学問観に疑問を投げかける。その前提には、なんといっても理論と実践の関係という問題が横たわっているからである。合理主義の立場からすれば、理論とは到達された真理であり、それに基づいて実践が行われるものと解釈される。しかしそれに対して、理論は仮説であり、具体的な実践の局面にしたがって柔軟に修正されるというプラグマティズムという立場がある。それによれば、人間は個々バラバラな個人として行動する

のではなく、社会的な存在である。その中には、家族、地域共同体、職業団体、国民など、さまざまなものが含まれるが、経済政策という観点から重要なものは国民である。プラグマティズムはかくして、経済ナショナリズムと結びつくのである。

生涯にわたり五〇〇以上の企業を立ち上げ、また六〇〇以上の慈善団体と関わりを持った洪沢栄一(一八四〇〜一九三二)、昭和恐慌に直面し、ケインズ的な財政金融政策の実施により世界恐慌からの回復を果たした蔵相の高橋是清(一八五四〜一九三六)、経済の根本が「国民の生産力」にあることを大戦前から見抜き、企業同士の結合や能率増進といった産業政策を奨励したが、第二次世界大戦中に戦時統制経済を推進したことにより、「軍国主義的」という汚名をきせられている岸信介(一八九六〜一九八七)、そして池田勇人政権による所得倍増計画の理論的支柱となり、一九七〇年代からは一転して政府主導による成長減速論を唱えた下村治(一九一〇〜一九八九)が本書の主人公である。

洪沢・高橋・岸・下村に共通している思想的態度として、プラグマティズムと経済ナショナリズムがあると著者がみなしていることは明らかである。しかし全体のポリリズムとしては全一章中の六章までに洪沢が言及され、関心が高いことがうかがわれる。短い章ながら、その白眉となるのが第三章だ。ここでは、「洪沢⇨ヘーゲル⇨スミスは、人間を原子的個人ではなく、社会的・道徳的存在とみなした上で、経済活動の相互依存関係を社会関係とみな

覆った粉塵により、地上に冬がもたらされたという理不尽な絶滅である。そうした環境の激変は、それまで恐竜が適応してきた環境とは関係がなかった。著書のいう「理不尽」とは、こういうことである。つまり、強いものや優れたものが生き残るのではなく、たまたま生き残ったからこそ適者とされ、滅んだからこそ、弱者とされているだけなのである。

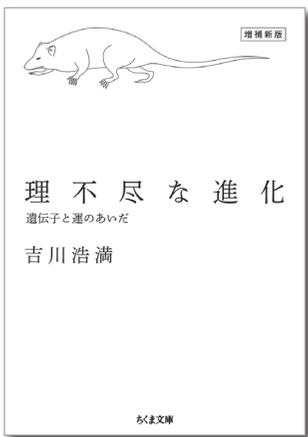
「進化論」の一般イメージである強者の生存が、これによって成り立たないことがわかるだろう。それは、「理不尽さ」ということに対して見て見ぬ振りをしている。それに対して専門家どうしの世界では、環境への生物の適応は、それにとまなう諸制約によるものとみなされる。その制約の内実を検証することが、主流派となっている適応主義というリサーチ・プログラムである。ここでは「理不尽さ」は「偶然」や「蓋然性」へと解消されてしまっている。

けれども、生物種にとつての「偶然」には、私たちの解釈という厄介な問題が残る。「偶然」と言われて、納得できないのだ。こうした「理不尽さ」をめぐる諸問題に向き合うのが、本書の三分の一ほどを占める長大な「終章」である。ここでは、大震災を例にしながら、あらためて「理不尽さ」とは、こうした「どうしてこうなった」他でもありえた「偶発的事象」に対して私たち自身が抱く人間的感覚である(終章)と取り押さえられた上で、理不尽さの感覚が特定の方法によって事象に説明を与える学問の外側にあることが説かれる。

すのである(第三章)と説かれる。洪沢らを「日本経済思想」として再評価するだけでなく、世界の諸思想と対比・比較し位置づけようとする志向がここには見られる。そうした意味でも、注目の一冊である。



日本経済学新論：洪沢栄一から下村治まで
中野剛志
ちくま新書



理不尽な進化：遺伝子と運のあいだ
吉川浩満
ちくま文庫

つまり、一般人には見て見ぬ振りをされ、専門家には「蓋然性」とみなされる「理不尽さ」への感度こそが、進化論の魅力であると同時に危うさであるのだ。こうして生物種への理解というより、いつの間にか「人間」をめぐる問いへと導かれていくことが、本書の魅力である。

吉川浩満

『理不尽な進化』

『遺伝子と運のあいだ』増補新版』

ちくま文庫、2020年・終章

テレビ・新聞・雑誌・ネット・中吊り広告そして社員研修など、私たちの身の回りには、「進化論」の比喩が溢れている。そこで説かれているのは「適者生存」と「弱肉強食」であり、要するにこの社会は生き残りをかけたサヴァイバル・ゲームであり、ここでは生物と同様に優れたものが生き残り、劣ったものは亡び去るのだ、ということになる。しかしこの描像は、どこまで妥当なのだろうか。そしてこうした一般化した「進化論」の比喩と学問的なそれとの間を通して、私たちの自己理解はどうなっているのだろうか。それが本書の主題となる。ここで踏されているのは、「理不尽さ」の感覚である。

たとえば白亜紀末における恐竜の絶滅について考えてみよう。絶滅には弾幕の戦場・公正なゲーム・理不尽な絶滅という三つのシナリオがある。弾幕の戦場とは、たとえば天体や隕石の衝突という大規模な環境変動によるもので、公正なゲームとは、生物種どうしの生存競争によるものだ。そして最後に、両者が複雑に絡み合った場合となる。恐竜がたまたま繁栄していた時代に、隕石の衝突の結果、天空を

の二部

本誌

西田彰一 NISHIDA Shōichi

立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員

碧海寿広

『仏像と日本人』

—— 宗教と美の近現代 ——

中公新書、2018年・第4章

小学生のころ、たしか奈良国立博物館だったと思うが、展示されている仏像を覗いてふと疑問に思ったことがある。「お寺にある仏像はお参りの対象なのに、どうして博物館や美術館に展示されている仏像は、博物館や美術館を訪れる人々の鑑賞の対象になっているのだろうか?」と。こうした疑問を抱いた人は、幼いころの私だけではないはずである。お寺の薄暗がりなかでお参りする仏像と、博物館や美術館で美術作品としての素晴らしいさやその歴史的価値に驚嘆するライトアップされた仏像は、明らかに見え方、配置のされ方が違うからである。

しかし一方で、博物館や美術館の仏像が完全に信仰の対象から外れた存在であるかといえばそうではない。それまで一体となっていた寺社から切り離され、日本美術史を構成する一要素として認識されるようになる。

そして第2章では、美術品・芸術作品として仏像を鑑賞することが出来るような環境が整ったことを背景に、和辻哲郎をはじめとする教養ある知識人たちが、日本固有の美として、従来寺社と一体であった伝統的な仏像のあり方と切り離して、美術品としての仏像の評価を行うようになり、そうした価値観が多くの人々に受け入れられるようになったとしている。このように仏像の美術的側面を重視した和辻であるが、こうした美術作品としての仏像の側面の強調は、のちに昭和戦前期に入ると宗教性を軽視している、あるいは高踏で道楽的であると批判されるようになる(和辻は仏像が有する宗教性を無視していたわけではないが、重点を美術的価値の評価に置いていた)。

そこで第3章で書かれているように、次第に教養ある知識人層の中から、龜井勝一郎や高村光太郎、北川桃雄らが、和辻哲郎ら従来の美術評論家に対して、美術品・芸術作品として仏像を評価することは、仏像が本来有していた宗教性を軽視していると批判するようになる。そして、仏像を前にした我々は、その「ただならぬ」を感じ取るべきであり、仏像の美的価値を議論する前に、まず宗教的信仰に帰し、祈りを捧げることが大事だと唱えたのである。

こうした傾向は、戦時中になるとますます強まっ

ない。博物館の展示品である仏像や仏画に対して法要が営まれていることは、時折地域のニュースで知ることがあるし、たまに展示品の仏像に手を合わせる人をみかけても、「信心深い人だな」と感心することはあっても、その逆はあり得ない。また、本堂に安置されているような仏像でも、「この仏像は美術的にこの点が優れていますよ」と解説を受けると、「なるほどそういう美術的価値もあるのか」と納得する人がほとんどであろう。

このように、私たちは仏像を美的鑑賞の対象として見つても、一方でまた信仰の対象であるとも見なししている。それでは、果たして私たちが仏像を見たときに感じる心情とは何なのであろうか。そこに注目したのが碧海寿広氏の『仏像と日本人——宗教と美の近現代』である。

碧海氏によれば、こうした仏像を美術品・芸術作品として見る行為は、じつは近代になって登場した行為である。近代になって西洋に由来する美術鑑賞の文化が日本にもたらされ、次第に仏像も信仰の対象としてだけでなく、美術鑑賞の対象として扱われるようになったのである。だが、仏像を美術品・芸術作品として見る文化が齎されたとはいえず、仏像を拝む習慣そのものがなくなったわけではない。近代に入って、日本人は仏像を美的鑑賞の対象と見なすようになりながらも、いまなお畏敬の念や敬虔な感情といった、宗教性を意識せざるを得ない対象として見ているわけである。本書は近代の日本人の仏像への眼差しの変化を通して、「美術と宗教のあいだ

ていった。特に龜井らは、戦争によって失われていく命に対する祈りを捧げる対象として、仏像を拝むことを推奨した。これは、知識人たちによる仏像が有する「宗教性」の再発見であった。だが、これは同時に仏像を拝むことで、戦争の勝利を祈願するということにも繋がり、美術と宗教の政治利用、戦争への利用へと展開し、仏像を昭和の戦争の渦中に巻き込むものともなっていた。

敗戦後の昭和戦後期に入ると、仏像をめぐる視点が本格的に変化するようになった。すなわち、宗教的なものとしての仏像への関心が、国家や共同体か

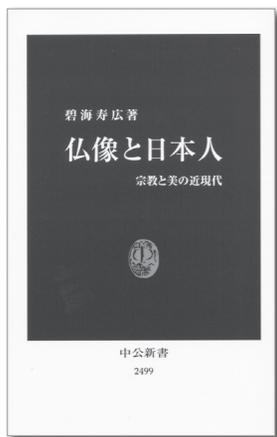
で揺れ動く、近現代の日本人の心模様を追跡する。そして、そこに見出される新しい宗教性の諸相を明らかにして」(こうとうするのである(11頁))。

本書の構成は次のとおりである。まず序章において、近代以前の仏像のあり方の紹介がなされる。近世においては、各寺院においては仏像そのものの美術的価値はそれほど重視されなかった。それよりも、参拝者にとっては、町村内における講などの集団的な巡礼や、秘仏開帳を目的とした参詣(あるいはそれを名目とする物見遊山)の対象として、寺社にとっては秘仏の開帳によって功德を得ようと参詣者を集め、寺社維持の資金を賄う経済的手段として機能していたことを明らかにしている。つまり、近世日本社会において仏像は、仏像そのものを鑑賞するというよりは、「仏縁」によって生じるさまざまな「功德」を得るための手がかりとして重んじられたのである。

次の第1章では、維新期の廃仏毀釈の嵐を抜けた明治期の日本における仏教再生の機運が語られる。仏教再生の手段として、仏教者および明治政府の役人たちから注目されるようになったのが、文化財としての仏像という新しい視点である。フェノロサや岡倉天心、小川一真によって、西洋由来の美術の視点から、日本固有の美として仏像の美しさが評価されるようになる。国威発揚のために文化財保護が叫ばれ、博物館・美術館といった施設が整備され、美術品・芸術作品としての仏像の鑑賞の基盤ができたのである。この過程によって、仏像が旧時代の遺物として破却される恐れは無くなったものの、仏像が自由な受容が行われることになった。

特に大きな変化と言えるのが、第4章で示されるように、仏像写真が流行するようになったことである。戦後に入っしてしばらくすると、土門拳や入江泰吉といった今なお高い人気を誇る写真家たちが活躍するようになり、彼等が撮影した写真が美術品・芸術作品として数多く流通するようになる。こうした仏像の写真は、人々にとって鑑賞の対象となると同時に、礼拝的価値を感じさせる作品ともなっていたことを本書は明らかにしている。

第5章では、観光地化をめぐる問題として、仏像が取り上げられる。戦後の交通機関の発達に伴って、仏像見物のために多くの観光客が訪れたことで、それまでの寺のあり方や周辺環境が激変した。この第5章では、戦後の観光ブームによる寺院空間の変貌に戸惑う人々や、便利な観光ではなく、敢えて自分の足で歩く巡礼への回帰を説く白州正子の西国巡礼論、観光ブームに対応し、古都税を設けて慢性的な財源不足を補いたい行政の思惑と、それを拒絶する寺院側の軋轢に焦点が当てられる。



仏像と日本人—宗教と美の近現代
碧海寿広
中公新書

の部

恋

そして最後の第6章では、田中ひろみやみうらじゅんの仏像論に注目し、現在の仏像ブームに直接つながるような、仏像に対するよりカジュアルな鑑賞や、時折そこに垣間見られる宗教性に注目し、現代における多様な仏像の受け止め方を論じている。そして、本書は「数々の古寺で仏像を見つめる観光客の経験は、その経験の多元性にこそ可能性が認められる。(中略) それぞれの興味関心や美意識から、仏像に独自の意味を見出し、固有の感情に包まれる。そして、それらの意味や感情から派生する宗教性に、ときに各自の心の安らぎや救いを求めていく」(243頁)と締めくくられている。

本書はどこから読んでも面白い本であると思うが、ここでは特に第4章に注目したい。土門や入江は写真撮ることで、優れた仏像の写真を美術品として作成し、しかもそれは戦後の現像技術・印刷技術の発展に伴って数多く流通するようになった。だが、土門にしても入江にしても、仏像の撮影に取り組むうちに、仏像が信仰の対象となっていたということに対する畏敬の念を抱き始めるようになる。そして、土門も入江も特定の宗教を信じていたわけではないと語っているにも関わらず、一種の宗教者のような

厳肅な心持で写真撮影に臨むようになる。そうして撮影された彼らの写真は、多くの人々の胸を打ち、その仏像写真を自宅で拝む人も出てくるほどの作品を残していくことになる。著者の碧海氏はここに注目して、土門や入江の写真は「礼拝的価値の回帰をもたらす作品(178頁)であると評価している。

土門や入江たちが自分自身の内面にあるホトケへの宗教心と向き合った結果、見る人の感情を動かす仏像写真が出来あがる。そして、その写真は、見る人によつては、独自の敬虔な心持に導かれるのである。こうした内面中心主義は、宗教が共同体の構成原理として機能していた近代より前の宗教のあり方とは異なっている。また、土門や入江の写真に心打たれた人が数多くいたとしても、彼ら彼女らすべてが明確に仏教に帰依するわけでもないであろう。だがその時その時に感じた感動や心の揺れ動きは、その彼ら彼女ら自身を個人として形作る人格の一要素となっていくのである。仏像写真によってつくられる個々の心に応じた感動は、まさしく現代における宗教への向き合い方の先駆けとなるのではないだろうか。

コロナ禍の影響で遠方に出歩きづらい今は、土門や入江の写真をはじめとする仏像の写真を見て、コロナが落ち着いてきた暁には、実物の仏像を親に行つて、どんな違いが自分の心に起きるのか考えてみるのも面白そうである。そんな日のために、碧海氏の『仏像と日本人』をまず手に取つて読んでみて、仏像鑑賞の歴史を知り、奈良観光・仏像鑑賞に思い

中島敬介 NAKAJIMA Keisuke
奈良県立大学ユーラシア研究センター
副センター長・特任准教授
松岡正剛&イシス編集学校
『インタースコア―共読する方法の学校』
春秋社、2015年

「際」^{まき}を極める。

——『インタースコア』のホンの一部
『千夜千冊』と『千夜・六万冊』

読まなくても「読める」ことがある。読んだ気になるという意味ではない。読んではいないけど十分(以上)に「自覚しながら、それでも「読めた」と思える場合があるのだ。主語は大文字の「私(ナカジマ)」目的語は「本」である。正確に言えば「その、本」だ。どの本か。

『松岡正剛の千夜千冊』にラインアップされている本たちの——「いくつか」——である。
一般に「千」という表現は多数を意味する。だが、ふつうこの文字で指示される対象の個数は、それよりもはるかに少ない。「千夜一夜」のアラビアンナイトは30余話・280夜前後に過ぎないし、千の顔を持つと豪語したミル・マスカラスも、リングの上ではたいてい似たようなマスク(覆面)を付けていた。青空一門の千夜一夜にいたっては、二人きりの漫才コンビだ(二人で十分に面白かったが)。セイ

ゴー・センセーの『千夜千冊』は、その社会通念(常識)を蹴飛ばして、開始から延べ7000夜を超え、今や2000冊を目前にしている。しかも、各夜に扱われる一冊は、「本」というメディアだけをとつても、分野も多様な(少くとも)数十冊を羽交い締めにして。2000冊の『千夜千冊』の背後には、多岐にわたる約6000冊の本が控えていることになる。

いや、ことになるも何も、東京は世田谷豪徳寺近くのセンセーの事務所には、実際に約6000冊の本がみっちり集まっている。見事に整然と——溜息が出るほど美しく——並んでいるが、正確な冊数は誰も数えられない。能力や根気の問題ではない。数えている最中にも、多数の本が運び込まれ、少なからず借り出されるからだ。蔵書の約6000冊は「約6000冊」としかカウントできない。世に言う、ゴートクジの不確定性原理である。

《金馬の卓見——「のよつなも」》

この本の冊数と存在感に圧倒されない者はいないが、とって一箇所以上の本が収納されている場所が、他にないわけではない。身近で言えば、私が居住する市の図書館には(いくつかの分館に分けられているが)約65万冊、ゴートクジの10倍以上の本がある(センセー個人の10倍に過ぎないと言ったこともできる)。ここでは2週間単位で12冊まで貸し出されるから、80回程度図書館に通い「一夜一冊」を続けられれば、3年たらずで「千夜千冊」となる。だが市立図書館をあてにした、この「千夜千冊」

を馳せるのもまた一興かもしれない。



で私に何ができるだろうか。本好きの嘶家、金馬の「居酒屋」風に言えば、できますものは千夜(3年という時間)の消費と「読書のようなもの」である。「読書」と言い切れないのは、図書館からは「その本」しか借りることができないからだ。たしかに数にすれば12冊ある。だが『千夜』のようにセッティングされていないから、1冊ずつをただ12回読んでいただけなのだ。だから「読書のようなもの」しかないのである。

《否定前提虚偽》のよつなも》

ネット上に開設されている『松岡正剛の千夜千冊』は書評ではない。内容の要約でもない。書評や要約ではなく、それらを含むセンセーによる総合的な本の紹介、とも言えない。じゃあ何なんだと聞かれても、答えられない。私の筆力に余るからではない(いや、筆力不足はそのとおりだが)。

答えが「ない」からでもない。答えは閲覧者の数だけある。あるいは閲覧回数総計ほどの答えがある。ある人にとつてあるときは書評となるものが、別のときには内容紹介の役割を果たすだろう。セイゴー・ファンには、センセーの嗜好と思考を探る格好のコンテンツとしても使える。だが私の『千夜千冊』は、確実に、そのどれともしつくりこない(セイゴー・ファンではないわけではないのだが)。

の「部

推奨する

本

《列車と乗客とプラットフォームの関係性》

もう20年ほど前になるだろうか、『考具』という愉快な本が出版された。『千夜』は言葉の純粋な意味で私の「考具」である。身の回りでもっと近い存在は(ありきたりで気の利かない喩えだが)駅のホームすなわちプラットフォームだろう。左右に行き交う列車と前後に動く乗降客は、ここで交叉する。いや——「ここ」——でしか乗客は列車にアクセスできない。乗客を私、列車を知と情報に置き換えると、プラットフォームは『千夜千冊』となる。

この列車は「本」だけではない。東西の横糸と古今の縦糸で、種々の学問分野が紡がれて、美術や工芸や産業や経済や政治や宗教を織り上げる中を、音声や絵や映像や味覚や皮膚感覚が、ジャンルをまたぎカテゴリーを超えて、文字とともに高速で往来している。各々は孤独にあるいは寡黙に編み目を通り過ぎていてのではない。強靱な糸で表皮を剥がれ、正体がむき出しになった「倫理」は悲鳴をあげている。時代遅れの「行儀作法」は研磨されて、別の価値を生む苦しみに呻いている。哄笑している「古典」の横で、「ポストモダン」はかこち顔だ。どれもが埒(らち)を越え、転移し合って行き来している。

共著である。後者の「イシス編集学校」は「世界で初めてインターネット上に開校した『方法の知』のための学校。[...]多様な職業、年代、地域から集った学衆が[...]師範代による編集指南により編集術を体得する」組織と書かれている。前者の「松岡正剛」とはセンサーで、「イシス編集学校校長」でもあるようだ。

タイトルの『インタースコア』とは聞き慣れない(見慣れない)用語だが、「ようするに『際で交わる』という意味」(p.79)で、「二つ以上のスコアに注目して、これらを『あわせ・かさね・きそい・そろい』にもちこんでみる編集方法」(p.81)と解説されている。そして、「スコア」とは、「日記や電話帳、音楽的楽譜、親と子の成長ぐあい、小説や映画の感想文、ダンスやバレエなどのコレオグラフ、ヘアスタイルの変化、家屋や機械の設計図、いたずら書き、野球のスコアブックなどのスポーツゲームの進行記録」(pp.79-80)、これに「植物相や動物相を示す生態系の変遷記録、通貨や株価の変移記録、医療機関が記録している心拍から血中濃度におよぶ生体の動態変化記録、国会ではいまだに実施されている発言の速記録、太陽磁気もたらすオーロラ、けものみちの跡、シュルレアリストたちの自動筆記、ホテルの点滅やミツバチの8の字ダンス」(p.80)、さらには「髭の伸び方だってスコアだ」(p.80)として、「うんと広く捉えてほしい」(p.79)という。

この本の副題は「共読する方法の学校」。本文中でフィーチャーされているのは、「誰かに薦めたり薦

《立ち位置》の問題》

『千夜千冊』には本を読むために必要な知と情報が——本以外にも必要なものが必要なだけ——周到に準備されている。そのための綿密な仕組みがつけられている。だから「読書ができるのだ」「読書のようなもの」でなく、ただし、いつも「読める」わけではない。有り体に言えば、「読める」こともある、という程度でしかない。『千夜千冊』の乗客(私のことである)は、滅多に車両に乗り込めない。ほとんどが、鼻先を掠めて走り去る急行列車だ。停車のそぶりも見せてはくれない。たまに目の前でドアが開いても、たいていはいきゅうぎゅう詰めで乗車できない。もっと悔しいのは、列車の美しい外観すら、滅多に見えないことだ。だから、シャッターチャンスも掴めない。2000本もの列車が行き交っているというのに。

プラットフォームの構造が悪いわけでも列車のせいでも、無論ない。定めし乗客のせいだろう。そもそも、列車に乗ろうとすること自体が憚越なのかもしれないが、そのことはここでは問わない(問うては先におすすめない)。どこに問題があるのか。

そう言えば、乗客(私のことである)はいつも黄色い線に足を掛けて、前のめりに立っている。黄色い線の外側が車内の内側になる瞬間に、一気に駆け込もうと算段しているからだ。思うに、この乗客の——私の——立ち位置が(いや態度というか姿勢も含めて)良くないのかもしれない。

めでもらったり、一緒に読んだりする『共読』(p.397)という読書方法である。複数のスコア(記録)を縦横に編み上げていく「インタースコア」と、一冊の本を複数の主体者で読み込む「共読」とは、どう関係しているのか。「本が編集されたプロセスをとるに追い、読書の再起編集プロセスを交わしあうければ、とても濃密な共読状態をつくれる」(p.400)と説明されているところから類推すると、追い・交わしう要素に異種にして複数の「スコア」が含意され、追い・交わしうプロセスが「インタースコア」ということになる。

《はじまりは「ホン」の一部》

この理解が正しければ(こうとしか解釈できないが)、ここでの「スコア」とは『千夜千冊』における多種多様な知と情報。そして「インタースコア」とは、その往来を仕切り、情報へのアクセスをコントロールする仕組みに他ならない。これって、探し求めるダイヤグラムそのものではないか。そうであるなら(そうとしか思えないが)プラットフォームにおける乗客(私のことである)の立ち位置は、『インタースコア』に書かれているにちがいない。

センサーの語りの部分は、この本の「1 インタースコアする編集力」と「5 校長へこふう談義」の2つ。合計で145ページ。これなら「読める」だろう。

ホンの一部だし。



インタースコア—共読する方法の学校 松岡正剛&イシス編集学校 春秋社

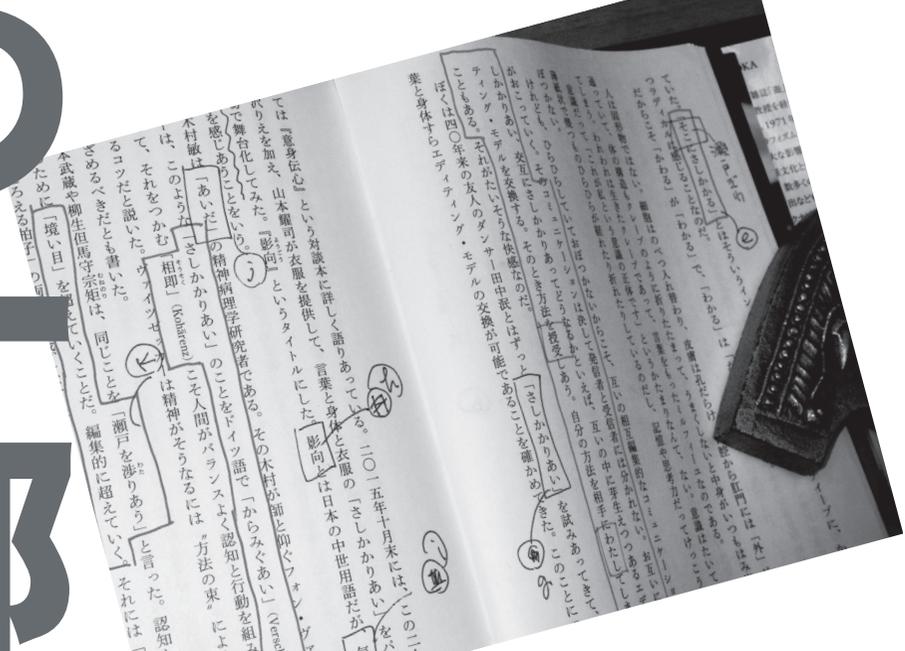
《ダイヤグラム》の不在》

左右に行き交う列車と前後に動く乗降客とがぶつからず、プラットフォームできれいに十字に交叉できるのは、左右(列車)と前後(乗客)の出入りが、ダイヤグラムでコントロールされているからだ。列車はダイヤグラムどおりに走り、客はダイヤグラムを睨んで、しかるべき立ち位置で列車を待つ。だから列車に乗れるのだ。プラットフォームのどこに、どう立てば良いのか、ダイヤグラムが知っている。だが、どこにあるのか。『千夜千冊』のダイヤグラムは、『千夜千冊』の中には——唯一——存在しない情報である。

《インタースコア》で瀬戸際を》

『インタースコア』という3.5センチほどの厚みの本がある。

その中に「瀬戸際にさしかかる」(p.21)という言葉があるのを見つけた。この言葉の近辺には「境目」(p.19)、「さしかかりあい」(p.20)そして「瀬戸を涉りあう」(p.20)という語も散らばっている。奥付によると「松岡正剛&イシス編集学校」の



の部